

仙台ロイヤルパークホテル総料理長  
池田一之さん  
いけだ・かつゆき



● Profile: 秋田県出身。83年 赤坂東急ホテル入社、ホテルパシフィック東京、淡島ホテルを経て、97年仙台ロイヤルパークホテル入社。08年総料理長に就任。16年フランス料理最高峰の称号の一つ「レ・ディシブル・ド・オーギュスト・エスコフィエ」を受章。

Talk About Future

# TOP INTER VIEW

## 未来について考える

## 「農業のまち登米」の

### 登米市民の「日常」は、 お客さまの「至福のひとつね」

当ホテルは、リゾートホテルで、週末に県内外から多数のお客さまが訪れます。リゾートホテルは、お客さまに「日常」を忘れていただく場所。そのためには、ゆったりとした空間とおいしい食事が欠かせません。

私が仙台に来たのは20年前。当時、フランス料理はフランスの、イタリア料理はイタリアの食材を使うことが多かったと記憶しています。近年、各地域の食材が見直され、その土地のものを各料理の調

理技法で提供することが、そこでできる最大のもてなしと考えています。そのような中、4年前に登米市、J.Aみやぎ登米と当ホテルが連携協定を結びました。これが、私と登米がつながるきっかけです。

初めて登米市産食材を味わったときは驚きました。野菜も肉も味がしっかりとっていて、非常に深みがあります。野菜好きではない私が、登米のものならいくらでも食べられるのですから。生産者の皆さんと交流、生産現場を見て

その理由が分かりました。「ものづくりへのこだわり」です。栽培技術はもちろん、おいしいものを届けたいという思いがあるからこそ、素晴らしい食材になるのだと思います。皆さんのおかげで、お客さまから多数お褒めの言葉をいただいています。素材が味を左右する朝食を褒められたときは、登米市農業の評価が上がったと喜んでいました。皆さんにとって当たり前前の食材は、私たちにとって、お客さまへの心からのおもてなしにつながっています。

今後も微力ながら、料理を通じて登米市農業のPRに貢献できればと思っています。

75年に就農して以来、40年以上農業を続けてきました。農産物の価格面では厳しい時期もありましたが、そういう中でも、希望や可能性があったから、ここまで続けられています。

多くの人が「農業」は「モノづくり」だとイメージしているのではないのでしょうか。私は、農業を「農村にある地域資源を生かした産業」と考えています。

新田小を対象にした「いのち教育」は、新田地区の食と農

### 農業は「農村にある地域資源を生かした産業」。これを生かすことが鍵

を通じて、命をつなぐことを伝えていきます。乳酸発酵あまざけ「初恋さくら」は、登米総合産業高と共同開発。生徒が作った環境保全米と、当社オリジナルの乳酸菌を材料に、若い女性にも飲みやすくしました。新田の食、学校、生徒、農産物、地名と全てが地域資源です。そう考えると、農業は非常に間口が広く、可能性のある産業だといえます。

講師として、各種研修会に招かれた際、新規就農者などに必ず話すことがあります。

それは「理念」を掲げること。「理念」は経営する「目的」です。農業が「なりわい」である以上、利益追求は大切なこととす。しかし、そこを目的にする、損得だけの経営になり、自分がやりたいことや、すべきことを見失ってしまいがちになります。

私は、人と自然へのやさしさを求めて「地域の『人』『もの』『環境』の価値を再発見し、新しい農村産業を創造し続ける」ことを事業理念にしています。地域資源は、価値あるものを探すのではなく、新しい価値を見いだすことです。皆さんの理念にかなう資源は、登米に無限に眠っています。

### 取材を終えて

近年、農業は農産物の価格低迷、後継者不足や農業者の高齢化など、厳しい状況が続いている。

市は、このような状況を脱却する一つの方策として、「ビジネスチャンス支援事業」などを展開している。事業は、農林業事業者が地域資源を生かし、施設整備、商品開発、人材育成や新規マーケット開拓などの事業を支援するもの。

今回紹介した3組の農業者は、それぞれが地域資源を生かし、自分たちにしかできない「オンリーワン」の農業を展開している。積極的に加工品を開発し、事業展開していくもの。父からの基盤を継承しつつ、新分野に挑戦し、世界を見据えているもの。本市の伝統野菜を中心とした園芸作物に、畜産、林業の展開を考え、ライフスタイルとして農業を選んだもの。

誰に言われるでもない、それぞれが考え、それぞれが選んだ農業のカタチだ。全員が経営理念を掲げ、出口である販路を自ら確保して経営していることから、一過性の取り組みでないことが分かる。

新たなことへの取り組みは、現状を把握、分析することが重要だ。新たなことに挑戦する前に、業務を棚卸しすることで、整理すべき点、改善点が見えてくる。専業でも、兼業でも、これは変わらない。また、新たに何かへ取り組みないまでも、自身の経営状況、目的などを整理することは大切だ。

現代は、「モノ」単品で勝負する時代ではない。多くの人が所有しているスマートフォンが良い例だ。スマートフォンは、単体では電話、メールとインターネットの閲覧機能しかない。しかし、アプリをインストールすることで、一気に用途が広がる。ナビゲーション、ゲーム、健康管理や音楽の再生など、数え切れない。

これと同様に、農業も組み合わせを考えることで、さまざまな事業展開の可能性が膨らんでいく。観光と組み合わせれば、農家民宿やアグリ・ツーリズム。教育、福祉や医療など、さまざまな産業や事業との組み合わせが可能だ。登米市の農業は、地域を見直し、そこにある資源と組み合わせること、まだまだ発展できる可能性が眠っている。

伊豆沼農産代表  
伊藤秀雄さん  
いとう・ひでお



● Profile: 迫町大形出身。75年に就農し、81年大形生産組合を設立。88年伊豆沼農産を創業し、農業を通じて多方面に事業を展開する。地域との連携にも力を入れ、16年登米総合産業高と、乳酸発酵あまざけ「初恋さくら」を開発。16年農事功績表彰緑白授有功章を受章。